

## 技術基盤センターは 農学生命科学の先端研究を 支えて行きます

農学生命科学研究科に技術基盤センターがあることをご存知ですか。また、その設立目的をご存知ですか。

近年、科学技術の発展はめざましく、また、情報工学の発達から知的情報は瞬間に世界の隅々まで伝播して行きます。このような変化の激しい世の中に対応するため、柔軟性のある高度な教育・研究が本研究科にも求められています。技術基盤センターは本研究科の教育・研究の高度化を専門性の高い技術の面から推進することを目的に2006年4月に設立された附属施設です。現在、農学部2号館2階の分析室の一部をお借りして業務推進室を設置している状況ですが、センターの立派な看板は掲げてあります。

本センターは、センター長(教員、兼任)と技術職員10名(副センター長1名を含む)で組織されており、センターの業務は技術職員が中心となって行われています。技術職員は、弥生キャンパス内の放射性同位元素施設とバイオトロンに各1名、先端機器分析室に2名(1名は専修の学生

実験室業務を兼務)、研究室に4名が勤務し、さらに、小石川植物園内にある樹木園に1名、茨城県常陸大宮市にある放射線育種場共同利用施設に1名が勤務しています。本研究科弥生キャンパスの250名以上の教員に対して10名という技術職員の体制ですが、全員、頑張っ業務を遂行しています。

本来なら、表題で「支えています」と言いたいのですが、先述のように本センターは発足してわずか、これから徐々に本来の設立目的に向かって組織を充実させるつもりです。少ない技術職員の体制で高度な技術支援をどのように達成するのか鋭意検討中です。その一案として、本研究科の教育・研究に最も必要な共通分野に技術職員を集中させること、必要性が高いものの現在、技術職員が配置されていない共通分野に新たに配置すること、などが考えられます。どのような分野がこれらに該当するのか、本研究科の教職員の意見を伺いながら進めて行きたいと思います。

技術基盤センター長 わたべしゅうご 渡部終五 教授



「技術基盤センター」の看板が掲げられたときの様子。生源寺眞一現研究科長(一番左)、會田勝美研究科長(当時)(後列左から3番目)、現センター長(後列左から4番目)と技術職員。



センター技術職員の技術研修会の様子(於:2008年11月茨城県東海村、大学院工学研究科原子力専攻研究施設)。附属水産実験所、附属緑地植物実験所の技術職員との合同技術研修会の一コマ。